

「全少」を日本一研究する指導者による提案

ZENSHOに

挑戦しよう！



養正館館長・渡辺貴斗

第24回

男の子と女の子（その8）

男の子への実際の指導2（子どもに届く言葉）

◆低めの球に手を出すな

10年位前にテレビであるプロ野球の監督が「選手に低めの球を打たせたくないときは、『高めを打て』と指示する。『低めを打つな』と言うと必ず低めの球に反応してしまうからだ」とコメントしていました。

つまり、「低めを打つな」とバッテリーに言うと、「低めは打つな、低めは打つな、低め、低め、低め、低め……」とバッテリーボックスで呪文のように頭の中で繰り返し、低めのボールが来た瞬間、「低め」の球に手がとっさに出てしまうのだそうです。「～するな」ではなく「～しなさい」でないと、人間はとっさに理解できないということです。

私はこの話を聞いてから、子どもたちに組手の指導をするとき、「下がるな」の代わりに「前へ出ろ」と言ったり、「上段を突くな」と言わずに「中段を突け」のように、否定語を使わないよう言葉を選んで指導するようになりました。プロ野球選手のような大人でも間違えるのですから、子どもたちが間違えるのは当然のことです。

全少の組手競技中に「中段突くな、中段突くな」のようにアドバイスしている指導者（もしくは観客席のパパさん、ママさんなど）がいますが、熱くなって怒鳴れば怒鳴るほど、選手はテンパって頭にこたましている「中段突き」しかやらなくなってしまうのです。

大人でも否定語はよく考えないと、一瞬意味を反対に取りかねませんね。女の子に比べ、言葉の発達が遅い男の子には、否定語を使わない方がストレ-

ートに理解してくれます。

「低いのはダメ、っていう意識を無くせ！」など、否定の否定を使っている指導者がいますが、大人でもすぐにはピンときませんね。この場合の最適な表現は、シンプルに「低く！」で十分です。指導者が一回、咀嚼（そしゃく）して、子どもに分かり易い表現に変えることが重要です。

◆大人の言葉・子どもの言葉

指導者が低学年に形を教えるとき、たとえば「左足を軸にして右回りしろ」と教えても、反対回ったり、右足を軸にしたり、止まったままで動かなかったりしてイライラしますね。そんなときは「話、聞いているのか?!」と怒りたくなります。実は、この説明では幼児～小2くらいの子ども（特に男の子）は理解できていないのです。

まず、「左右」が分かっていない可能性があります。養正館では白帯が中心の初級の部では、左右についてクイズを出してみんなで覚えることから始めています。小2でも左右が分からない子が大勢います。「左」が分かっていないのですから、もちろん「軸」の概念も分かっていません。このような抽象的な言葉は、子どもが理解するのはかなりあとですので、何度説明してもできないのは、指導者の使う単語が難しすぎる可能性があります。

形指導で「はい、演武線は45°の方向だよ」なんて言っても低学年は全く理解できていません。角度を算数で習うのは4年生です。よって、5年生以上でやっと何とか理解していると考えたほうがいいで

しょう。「演武線」という単語も当然分かっていますませんが……。

「何度言ったら分かるんだ！右手だよ右手！」「時計回りって言ったじゃないか！180°回るんだよ！」と怒鳴っても左右も角度も分からない子どもには理解できないのです。怒られながらだと、「僕は左右が分かりません」とは言い出しづらくなってしまいます。一度、道場生全員に左右のテストをしてみてください。驚くほど、分かっていない小学生がたくさんいることに気付くことでしょう。

◆興味を持つと頑張り出す

本来、女の子に比べ男の子の方が空間認知能力が高いので、形の順番を覚えるのは早いはずですが、かしながら、実際は女の子の方が圧倒的に早く覚えます。これは、話や説明を聞いていないのが、男の子に多いからだと考えられます。男の子はオタク気質ですから、好きなことにしか興味を示しません。大抵は形の順番を覚えることなんかは一切興味がありません（虫図鑑に出てくる虫の名前や、東海道線の全駅名は誰も頼んでいないのに全部暗唱できたりします）。よって、注意を促しても集中力は1秒しか持ちません。そこで、まず怒鳴るのではなく、「形の順番を覚える」ということに興味を持たせることが先決です。

「白帯から黄色帯になれたらうれしいね」、「黄色

帯になったら中級の部に行けるよ」、「ピンアン二段を覚えたら、あっちのお兄さん達のグループに行けるよ」など、前向きになれる目標を持たせると男の子は急に頑張りだします。

◆子供に届く言葉で

指導上、男の子と女の子の違いを理解しておく、イライラが減り、指導者も子どももお互いに幸せです。「モノ覚えが悪いなあ。バカなんじゃないか？」、「話聞いているのか？ オマエ、やる気あるのか？」とイライラするのではなく、「指導の仕方の問題があるのではないか」と自分に矢印を向けられるようになると指導者は成長できます。子どもはみんな真っ白なキャンバスで、大人次第でどのようにでも染めることができるのです。

PROFILE

■渡辺貴斗 TAKATO WATANABE

1968年4月20日生まれ。7歳から父である館長から空手の手ほどきを受ける。先代の病気をきっかけに養正館を継ぐ。児童心理学や成功哲学を研究して子どもたちの「心をつくる」指導法に切り替え、2013年全少5名入賞、2014年・2015年と2年連続で7名入賞、2016年5名入賞させ全国最多入賞道場となる。道場経営でも、一道場で350名を超える大躍進を続ける。



日本空手道鴻志会空手道場養正館／静岡県沼津市本町11-12

Column どうやって道場生350名に増やしたか？ その1

養正館道場には約350名の道場生が通っており、現在も増え続けています。ひとつの道場としては、全国でも最多の部類に入ると自負します。私は、空手指導が専業で、他には仕事を持っていませんので、生徒数の減少は即、死活問題となります。専業で24時間空手だけを考えることができるので、兼業で空手指導している先生方には負けられない、といつも自分を鼓舞しています。よって、生徒募集は、空手技術の研究、コーチング・メンタルトレーニングの研究と並んで、常に勉強し情報収集している私の最大の関心事のひとつです。

養正館は、現在、4年連続で全少入賞者数が全国最多ですが、それには「生徒数が多い」ということも大きな要因となっており、全少入賞者数は道場生数に比例すると考えます。道場生が少ないと活気もでませんし、切磋琢磨もできません。全国には、養正館以外にも、大勢の道場生を抱える道場があると思いますが、入門者を増やす独自のノウハウがそれぞれにあることと思います。私がこれから公開

する方法は、すでにベテランの先生方が経験されたことばかりと思いますが、空手指導初心者の若い指導者のみなさんには少なからず参考になるかと思えます。

一般的に、「道場生数を増やす」ことは、「入門者をいかにして増やすか」のみに注目しがちですが、「辞めずに続けてもらう」ことにも注視していかなくてはなりません。道場生をいくら増やしても、どんどん辞めていってしまっただけでは本末転倒です。底の抜けたバケツに、一所懸命、水を入れ続けるようなものです。今までの連載では、「空手を辞めない」で続けてもらうにはどうしたらよいかを述べてきました。本コラムでは「入門者をいかにして増やすか」に的を絞り、私がこれまでに試行錯誤してきた経緯と有効な方法について（失敗例も含め）、次号より数回に分けて紹介していきます。最近の子どもたちにはサッカーやスイミングが人気ですが、少しでも空手人口増に寄与し、空手界に恩返しできれば幸いです。

